

産炭地域の今日的課題への取り組み

— 自分史との関わりを軸に —

Grappling with Today's Problem of a Coal Mine Area:
Centering on Relations with the Self History

吉岡 宏高

今日のテーマは、布施調査を今日的にどう生かしていくのかということだと思います。SORDの皆さんと初めてお会いしてから、今日まで考えてきたのは、地域の状況があまりにも変わってしまった中で、布施調査をダイレクトに生かすことができるのだろうかということです。

大きな変化の波にのまれた空知産炭地域で成長した私が、布施調査を最初に眼にした時に、どのような思いを抱き、なぜそういう思いを抱いたのかということから、自分史と絡めてお話ししたいと思います。

1. 布施本との出会い

まず最初に、私と布施本（布施鉄治『地域産業変動と階級・階層』1982年）との関わりについてお話しします。この本の発行は1982（昭和57）年で、ちょうど私が福島大学経済学部に入學した年です。大学生協の棚にあるのを見つけたのですが、大学生にとって15,000円という値段は目玉の飛び出るような金額でした。

しかし、中を見てみるとH鉱職員番号2番は「なんだSさんじゃないか」とか…(笑)。実はSさんは、H鉱に移る前は私のいた幌内鉱におり、Sさんの長男は私より一歳下で幼なじみです。Sさんと、父の職員登用試験や炭鉱病院事務長への異動という、その後の我

が家の行く末に影響をもたらした関係者の一人でもありました。このような、私にとって身近な人々の記述が満載した内容を見て、これは是非買わなければと、清水の舞台から飛び降りる気持ちで購入した記憶があります。

これほどのページ数ですが、眼を皿のようにして隅々まで読んでみました。炭鉱が持つ様々な特徴を、意欲的に切り取ろうとした大作であるというのが正直な印象でした。さすが、社会学者が集まると、複雑な要素が交錯する炭鉱を、これだけ網羅的に捉えることができるのかと感心もし、今から思えば僭越ですが、当時18歳の若者としては「結構やるじゃないか」という感想を持ちました。

私の父は炭鉱の隅々まで眼を行き渡らせる労務の仕事をしていた関係で、私も年齢の割には炭鉱の現実を良く知っていました。炭鉱での生活を体験していない外の人が、現実の姿をある断面で切りとろうとする訳ですから、感覚にズレが出るというのは仕方ないこ



とです。しかし、布施本の内容が、暮らしの実感を持った者の心にどこまで届くのだろうかということが、最初に読んだときのチェックポイントでした。

例えば、布施本の中には、H鉱職員の次のようなコメントが記されています。「鉱員は常に労務課の人間を恐れているのがよく分かる」(布施本 p.166)、「右はやくざから左は共産党のコチコチまで付き合う。ある意味では面白い仕事。半面町中が知り合いばかりで、いつも見られているような気がする。夕張の山を越えると、関所を越えた様な気持ちになりホッとする」(布施本 p.167)。この証言をしているH鉱職員番号の2番・3番は、試験によって鉱員から職員となった登用職員で、私の父とほぼ同じような境遇にあります。私は、父親の仕事と自分の生活が一体化した中で育ったので、その仕事は手にとるように理解できるため、このようなコメントは非常に良いところを捉えているなど感じました。

2. 感じたズレ

しかし、根本的な所でズレを感じたのは、当時の捉え方として一般的なものであった、労働者と経営者というような固定的な構図です。ある理論や視点に立って分析を進めるのは当然なのですが、現実の姿が大きく変わりつつある中で、伝統的な価値観や視点が見え隠れして、私の炭鉱での生活実感や視界との間に、ズレを感じたのです。

まず一つめは、静的な捉え方に対するものです。私の父は、炭鉱内異動によって新幌内砦から幌内砦へ移ったことで、様相が全く異なる二つのヤマを経験してきました。鉱員と職員の双方の階層を経て、右も左も上も下も様々な立場の人のバランスをとりながら、人との関係性の中で一つの方向へ力を結集していく仕事をしていました。父からは、断片的にはありますが、炭鉱についての多くの情報がこぼれ落ちてきます。それを、自分なり

に日々理解しながら暮らしていた私は、会社も悪いことをしているのだろうが、鉱員や組合だって必ずしも善ばかりではない、様々な人がいれば様々な立場や見解があるということ、小さい頃から感じつつ育ってきました。

炭鉱での労務という仕事は、様々な立場を理解し、日々変化する事態や関係のバランスを捉えなければやってゆけません。とは言っても、最大公約数の中に正しい結論があるとは限らないので、自分なりのポリシーを持たなくては、日和見になってしまいます。かといって、自分の考えを力によって強制しても、人は動きません。どちらが正しいか正しくないか、良いか悪いかではなく、全てを一度飲み込んだ上で、新たな現実を創出する原動力となるようにバランスをとっていくということです。そういう姿を見て育った私は、世の中は答えが一つとは限らないということ、身をもって感じながら育ってきました。このような視点から見ると、布施本は、ちょっと捉え方が静的で単純かなというのが正直な感想でした。

二つめは、炭鉱社会の最大の特徴であった、職員と鉱員との境遇変化への認識です。確かに石炭産業最盛期には、職員には圧倒的に恵まれた環境が用意されていました。最盛期に職員は賞与が20ヶ月も支給されたことがあると、父が話していたことを覚えています。私が住んでいた最後の職員住宅は、職階が参事二級(課長)以上の職員が入居できる課長住宅だったのですが、この古い木造住宅には私のいた頃はすでに空戸が多く、1970年代後半には参事補(課長代理)の資格しかなかった父でも入居できました。その社宅の台所の横には、かつて女中部屋であった三畳間がありました。私が生まれた1963(昭和38)年は、炭鉱は最後の華やかな時代で、私より12歳年上の青木さんは小学生でしたので、その雰囲気を知っていると思います。

私は炭鉱最盛期に生まれたので、物心つく

と坂道を転げ落ちる姿しか記憶になく、急激に凋落するプロセスを見ながら育ちました。布施調査が行われた1970年代に、職員層と鉱員層の実質的な地位が逆転するのですが、1972年の札幌オリンピックがターニングポイントではなかったかと思えます。多くの方が、炭鉱は人が余っていて、大規模な合理化が最後まで続いたというイメージがあると思えます。それは、1960年代のスクラップ&ビルド政策の頃の話で、1970年代に入ると、鉱員は建設業や製造業に流出して人手不足の時代になったのです。

この頃の父は、毎月のように道内の職業安定所を駆け回り、炭鉱閉山があれば山元に泊まり込んで、他の炭鉱と競争しながら、できるだけ勤務成績が良く技能が確かな鉱員を採用しようとしていました。

特に幌内砦では、1975年に北炭の経営を根本から揺さぶり夕張新鉱事故に繋がる遠因となった大きなガス爆発事故があり、これを境にますます鉱員の炭鉱離れが進み経営も悪化しました。そうなる、まずは給与カットから経営改善がスタートします。鉱員の給料をカットすると退職してしまうので、真っ先に対象となるのは職員でした。毎月のように「今月は〇〇億円足りません、資金繰りがつかないと会社は倒産します、ご協力をお願いします」という内容のチラシが、職員の家庭に配られました。賃金は現金支給を大原則とし、「賃金の支払い確保等に関する法律」でも厳に規定されていますが、これに違反してさえも強制的・名目的に社内預金という形で支給されました。賞与などは、現金支給は「越盆一時金」「越年一時金」とう名目の10万円程度で、あとは社内預金です。鉱員には、現金支給しないと炭鉱を辞めてしまうので、額は減り続け自治体や労組から借金をしながらですが、現金で支給されていました。

また、外的環境との関係だけではなく、内的環境も大きな変貌を遂げつつありました。

生産現場では、かつては「先山」と「後山」という一対一の労働が主流でした。それは、坑内の技術伝承というフォーマルな部分だけではなく、坑外での家族ぐるみの付き合いというインフォーマルな部分まで包含するものでした。1970年代に入ると、坑道天盤を支える自走杵や、巨大な鉋で炭層を一挙に削るドラムカッターを主流とする重装備機械採炭が、急激かつ本格的に普及します。機械化でチームでの仕事が主体となり、炭鉱社会でのインフォーマルな関係が急激に希薄化するのです。布施調査は、この激しく移り変わる過渡期に調査を行っているのですが、その変化を十分に捉えていないことに違和を感じました。

三つめは、これだけ調べておいて、それではどうすれば良いのかという主張が無かったことです。「なるほど、そういう見方をすればそうだな」「ここはよく調べているな」と読み進め、それでは一体どうするのか、この厚い分析をどのように現実に反映しようとするのか…と終章に期待していました。ところが、「本書であきらかにしえた多様な諸事実からの理論化に関しては、より慎重な熟考が必要と考えたからである」(布施本 p.766)となっていて、何も示されてはいませんでした。結局、これまでの分析は何のためだったのかと落ちてしまいました。

大変申し上げにくいことなのですが、社会学に良く見られる、非常に鋭い視点で問題点を指摘しながら、「ではどうするの?」「どうすればよいの?」という局面に来ると、途端に割り切れない部分が見えてくる好例ではなかったかと思えます。逆に都市計画などの工学分野では割り切りすぎて、具体的な方法を考える前に、「それをやるべきなのか」とか「どういう方向に進むべきなのか」について、もっと考える必要があるのではないのかと思うことが多くあります。この社会学と工学との間は、内科と外科の間のようにポツカリと穴が

空いており、その間を埋めるべき、臨床的な機能が満たされていないと感じていました。この本を読んだ時から私は、地理学と経営学…いわば空間とマネジメントという、異なる領域・アプローチを組み合わせて、その隙間を埋めることができないだろうかと考え始めたのです。

3. 自分史：吉岡家の歴史について

次に、私がなぜ地域に関わる仕事をするようになったのか、ということについてお話しします。ここから、布施本に対してズレを感じた原因を、逆に皆さんに探っていただきたいと思っています。

私の妻は元役場職員で、育った家庭は明治時代に富山から十勝へ入植して以来、一貫して畑作農業を続けてきました。これに対して吉岡家は、ジェットコースターのような波瀾万丈の系譜なので、結婚した当初は、そのスピード感や不安定性に妻は驚きを感じたようです。

私の曾祖父は、山口県岩国市の出身で、農家の三男でした。長男しか田畑を継ぐことができないので、明治の初期に近隣の若者たちを誘って、日高支庁の沙流川下流域の平取・鶴川付近に入植しました。今でも沙流川は暴れ川として有名ですが、何も知らないで入植した先祖は、沙流川の大水害にあって、開墾したばかりの土地が全てダメになってしまいました。そこで起死回生の策として注目したのが、当時、活況を呈していたニシン漁です。水害で全て失ってしまったので借金をして、羽幌町北部の築別で漁場の権利を手に入れたのですが、不漁が続き一向に事態は改善しません。さらに借金は増して、ついに一家は逃げるように樺太へ渡ります。

当時の樺太は「三井の島」でもあり、王子製紙と三井鉱山が羽振りをきかせていました。樺太に渡った吉岡一族は、その後、王子製紙の傘下で森林を伐採する造林業によって

成功を取めます。ようやく一家が成長過程に乗ろうとしていた初期に、祖父はニシン漁の出稼ぎで繋がりがあった秋田出身の祖母と結婚します。吉岡家の主な事業地は、落合の北方にある陸地がくびれた部分にある突祖山のあたりで、祖父の兄弟たちが、それぞれ柴浜・豊原・大泊に分かれて事業を展開し、私の祖父は大泊の担当でした。

祖母の話によると、北海道へ出張した祖父から「二千円送れ」と電報が来たので、すぐに電信為替で送金したら3頭のサラブレッドを連れて帰ってきて、競馬場では馬主席で観戦していたとか。叔母によると、小学校の時に担任の先生から「いくら貯金があるか」と聞かれたので、叔母は300円と答えたところ「嘘をつくな」と言うので家に来てもらい貯金通帳を見せると、「恐れ入りました」と帰っていったとか。父も私も吉岡一族の特徴でもある太い眉なのですが、吉岡城下町のようになっている事業地の駅を降りたら、駅員が眉だけを見て「吉岡の方ですね」と言ったとか。山を二つと、漁場を一つ所有していて、秋には鮭が押し寄せて海の上を歩いて渡れるような感じだったとか。私は、隆盛時の話を祖母や父、親戚から聞かされて育ちました。

それが終戦とともに、財産は全て接収され、生活は一転してしまいました。祖父は終戦直前の1924(昭和19)年12月30日に病死しており、長男は盛岡高等工業専門学校へ行ったきり交通途絶で帰ることができず、次男は結核で寝たきりでした。一家の生活は、三男で旧制大泊中学校の3年生だった父親が支えなければならぬ事態になりました。そこでどうしたかと言うと、一ヶ月でロシア語を覚え、ロシア語の通訳になりました。同級生たちは寒空の戸外でモッコ担ぎをする中で、父は事務所にいて事務をしていたそうです。わずか一ヶ月で、電話ができるくらいのロシア語をマスターするというのは、今となっては信じられないことです。どうもいろいろな人から

聞くと、それは嘘ではないらしく、その後の炭鉱での仕事ぶりからもわかるように、それだけ優秀だったのだらうと思います。

その後、父たちは樺太から1947（昭和22）年に函館に引き揚げ、秋田にある祖母の実家を頼って落ち着きました。父は小学校の代用教員をしていたのですが、いつまでも身を寄せている訳にはゆきませんでした。たまたま、盛岡高専を卒業した長男が、積丹半島の茅沼炭鉱（泊村）に電気技師として就職したので、一家は兄を頼って身を寄せ、父も鉱員として働き始めました。父は体格が良く運動が得意で、樺太ではスキージャンプや相撲をやっていたのですが、茅沼鉱では野球部の選手となりました。北炭には、その野球が縁で採用され、幌内鉱業所新幌内砒務課の鉱員となりました。昭和20年代後半は炭界不況の真っ最中でしたが、当時、炭鉱で盛んだったアマチュアスポーツの選手は例外だったようです。採用時の逸話として…不況で新規採用はストップしていたので、監督からは歌志内の北炭空知鉱業所神威砒に在籍していたことになっているから、面接の際は口裏をあわせるようにと言われたそうです。面接の試験官から「神威砒は何という駅で降るの」と聞かれ、答えられなかったとか（笑）。それでも採用されたのですから、不況と言えども炭鉱会社の懐はまだ深かったのでしょう。

樺太時代の栄華からみれば大したことはないのかもしれませんが、苦労の末に一家を引き連れ外地から引き揚げ、自分の実力で花形の炭鉱会社に採用され、鉱員としてですが炭鉱事務職の中核であった砒務課に配置されたのです。野球では4番バッターで、スキーでも一級指導員となりました。

しかし、結核を患ってしまい、またもや境遇が一転してしまいます。当時の結核は、今の癌に相当するくらいの大病で、炭鉱でも福利厚生上の大問題でした。北炭は、夕張に専用の結核病棟を持っていましたが、これとは

別に日赤伊達病院の結核病棟を一棟借りしていました。父はそこに3年ほど入院し、胸骨を切除する外科的治療で完治したのですが、病棟看護師だったのが私の母です。

母方の祖父は北炭平和鉱業所平和砒で保安部門の先山鉱員であり、母は三人姉妹の長女として炭住で生まれ育ちました。保安の重要任務は坑内の風の流れをコントロールすることで、そのために坑道に通気門という巨大な木製ドアを作る仕事で、保安員業務の一つとしてありました。そのせいか、祖父は大工仕事が巧みで、炭鉱離職後に北炭観光開発の章月グランドホテルのポイラーマンとして勤務していた時に、定山溪に中古の家を買って自分で大改造し、風呂場は建屋から配管まで含めて全て自作したほどです。母と妹たちを産んだ祖母は、厳しい姑とうまくゆかず祖父と離婚して、北炭化成鉱業所の煙突建設作業などのために来ていた鳶職と再婚します。その後、祖父も再婚したので、私には母方の祖父母が4人いました。狭い炭住社会では、このような一種のスキャンダルはすぐ広まるもので、母は早くここから逃げ出したいという気持ちがあったと聞いています。母の学業成績は良かったらしく、千代田中学校を卒業してすぐに日赤伊達病院の看護学校に入学しました。私が高校の時に、母と看護学校の同期生で、その後も日赤病院に残って師長になっている方とお話しをする機会があったのですが、「お母さんは私よりも優秀だったから、病



母と私—背景は北炭新幌内砒ズリ山

院に残っていたら総婦長（総看護師長）になれたかもしれないのよ」と、お世辞も含みながらでしょうが教えてくれたのを記憶しています。母は、その後、結婚前の父の援助で高等看護学校に通い正看護師となり、その他に保健師と助産師の資格も取得しました。父と結婚したのが1959（昭和34）年で、その4年後に私が生まれました。

結核で野球を断念し、結婚して家庭を持った父は、職員登用試験を受けようと思いました。父は、時代が違えば旧制中学よりも上級学校に進んでいたろうし、本社採用の職員となっていた可能性だって否定はできません。当時の炭鉱には、戦争のために進学できず、戦後はやむなく鉱員として炭鉱に入った父のような人が多くいました。登用試験の願書を出そうとしたら、上司から「社歴が古い人が先だから今回は待て」と言われ、本当は受けたかったのですが受験を断念します。その頃は、石炭鉱業審議会から石炭政策が答申（1962年）される前夜で、合理化が始まろうとした矢先でしたから、翌年からの登用試験は中止になってしまいました。この時に先に受験し職員登用されたのが、布施本のH鉱職員番号2番のSさんです。父は、タッチの差で登用試験を受けることができず、再開まで待たされることになりました。

ようやく登用試験が再開されたのは1965（昭和40）年になってからです。再開まで6年間も待っていた鉱員が一斉に受験しま



北炭幌内鉱の選炭機

した。技術系では昭和30年代前半にドイツへ派遣された鉱員がたくさん受験しています。数多くの鉱員から選抜されてドイツへ行き、ドイツの国家資格を苦勞して取得し、帰国して登用試験を受けようと思ったら中止されていたので、この人たちも試験再開まで待たされていました。この年の登用組は、その後の昇進スピードや職歴を分析してみると、他の年次の登用組とは異なっていることは確かです。

父は職員となり、従来と同じ職場の新幌内砒労務課に配属されます。2年後の1967（昭和42）年、新たな立坑掘削によって幌内砒と新幌内砒は統合され幌内炭鉱となり、父は幌内担当として幌内地区に移り住むことになりました。新幌内と幌内は、一つの山の両方向から掘進しており距離も近いのですが、全く異なる性格を持っていました。新幌内は、昭和初期に別会社によって開発され、戦中に北炭に編入された炭鉱で、鉱歴も新しく開けた土地にありました。幌内は、炭住が狭い沢に沿って展開し、1879（明治12）年に本道初の近代炭鉱として開発されたという長い歴史を持っていました。私が子供の頃には、すでに親子三代目の鉱員が現れており、地縁血縁が濃密に張り巡らされた社会でした。私が小学生の頃の労務係長は千葉さんという方でしたが、その血縁は芋づる式に何百人という単位に及ぶほどでした。

幌内は狭い谷間に親子三代で続く非常におとなしくウェットな感じですが、新幌内は開けた場所に広々と展開する一代鉱夫の集団で開放的でドライな雰囲気です。そもそも炭鉱というのは、鉱員の気質だけではなく、賃金体系も、仕事の仕方も、組合も、習慣も、ヤマごとに全く違うのです。特に幌内と新幌内は、水と油のようなもので、それが立坑完成を境に一挙に統合したのですから、労務としては大変な苦勞があったと思います。

やっとの思いで職員になったのですが、皮

肉にも昭和40年代は職員の地位が相対的に低下しはじめる時期で、金銭的なメリットを享受することはあまりませんでした。しかし、職員になったことの自負は、極めて強かったようです。登用職員というポジションを自分で勝ち取ったことや、ようやく自分の能力に見合った仕事の立場と権限を得ることができたことが、仕事に向かうバイタリティーだったのだろうと、私は後から父の気持ちを忖度することができました。

1977(昭和52)年には、父は昭和40年登用組事務系のトップを切って係長になりました。それも、炭鉱事務職の花形である労務係長です。係長の下には、炭住ごとに配置され鉱員の労務管理の要である労務連絡員、炭鉱の警察とも言える監察員、クラブの従業員、バスの運転手など、炭鉱のあらゆるところに60人くらいの部下がいました。労務係長の仕事の成果は、出稼率(=鉱員の出勤率)として如実に表れます。この頃の父は、神経質で気難しくなり、家庭はピリピリした雰囲気になりました。1975年11月の災害による坑道水封が一年に及び、その復旧した直後でヤマが動揺している頃でしたので、難しい状況で重責を担っているという気負いがあったのだと思います。

その後、ヤマ元経験の長いT労務部長と、本社経験しかないO労務課長という、ともに破天荒で炭鉱労務屋らしい二人の上司の関係悪化の中で、職制上直属の上司である労務課長に従って筋を通した父は、一転して幌内炭鉱病院事務長という閑職に追いやられます。事務長は課長職ポスト(参事二級)なのですが、課長代理職(参事補)のまま父が異動となり、「炭鉱病院に実力派事務長来る」とある意味皮肉がこもった話題となりました。父は炭鉱病院でもいろいろと改革を進めるのですが、労務係長の時と比べ格段に楽な仕事です。今まで午前0時前に帰ってきたことのなかった父が、いきなり勤務を定時に終わり午後4

時過ぎには帰宅するのですから、私はしばらくはこの激変についてゆけなかったほどです。父は後から振り返って「あのまま労務にいたら身体を壊していたかもしれない、炭鉱病院への異動は天の配剤だった」と述懐しています。父の職場での環境は、それまで労務職員として日夜奮進してきた末に、一片の辞令で「毎日が日曜日」へと激変しまいました。しかし、ふて腐ることもなく新たな環境で日々過ごすあり様は、私の心の中に深く刻まれました。

結局、平穏な炭鉱病院勤務は、私が大学2年であった1983年の経営合理化で病院が廃止されるまで約5年間続きました。もっとも病院の廃止が具体化してくると、ただでは済ませないのが父の性分です。従来的人员・設備を引き継ぎ独立採算の病院とする計画を、短期間のうちにまとめあげ周囲を説得するなど、父は俄然活動を開始します。あとちょっとで具体化する所まで進んだのですが、結局、頼りの病院長が最後まで決断できずにタイムアウトとなり、病院は廃止されてしまいました。たぶん、炭鉱にとって不可欠な救護隊付医師が所属する炭鉱病院と言えども、いつかは合理化対象になる可能性を予見していたことが、短期間で精力的な活動に結びついたのでないかと思えます。炭鉱生活の最後の局面でも、「治にいて乱を忘れず」という教訓を私に示してくれました。私が福島大学に行っている間に札幌に移転したので、私の炭鉱生活は住み慣れた炭住に別れを告げぬまま20年でピリオドを打ちました。

4. 私の人格形成

炭鉱は、職住近接どころか、職住一体ですから、当然、父の仕事や炭鉱の経営から直接的に強い影響を受けます。特に職員、なかでも労務職員の子弟は注目されやすい存在です。何せ労務職員は2,000人近い全従業員のことを知っており、従業員は労務職員のこと

を知っている訳ですから。そして職員の息子は、「勉強が出来て当たり前」「下手なことはできない」という無言の圧力を感じながら学校に通うのです。

子供社会の中では、「職員は鉱員より偉い」というステレオタイプの説に対する意味での、逆差別のようなものがありました。例えば、仲間に入れてもらえない、一緒に遊んでももらえないというような疎外感です。職員住宅は、行政上の「〇〇町」という呼称とは別に通称「〇〇台」と言われ、一般に鉱員炭住よりも標高が高い所に区画されていました。鉱員の子弟が遊びに来るには、まず物理的に坂道の移動が大変でした。新幌内では、職員も鉱員も地形的には同じところに住んでいるのですが、やはり職員住宅は「〇〇台」で、職階が上の住宅ほど近寄りたがたい感じなのです。ですから遊び相手は、もっぱら教員や商人の子弟です。職員の子弟は人数が少なく、同級生で職員の子弟は女子2人しかおらず、あとは全員鉱員の子どもでした。みんな地区ごとにグループを作って遊ぶのですが、私には相手がない。そこで上級生や下級生である数少ない職員や炭鉱外の子弟と遊ぶのですが、それでもたかが知れています。

そんな中で興味を抱いたのは、炭鉱の施設を歩き回ることでした。好むと好まざるに関わらず、労務職員の父からは、炭鉱の様々な情報がこぼれ落ちてきて、小さいながらも私はすごい耳年増になっていました。ほとんど生半可な知識なのですが、実際に現場に行ってみると、その知識を検証することができ、



幌内の炭住（炭鉱住宅）

さらに新たな発見がありました。あそこには、こんな坑道があった…という話を聞いて探してみると、実際にある訳です。こういう場合、父が労務にいるというのは極めて有利なことで、「労務の吉岡の息子で～す」の一言で、大概の場所には臆することなく分け入ることができました。父の話と現地で得た断片情報をつなぎ合わせると、炭鉱のいろいろな像が浮かんで来るのです。今から思えば、一種のインタビューとフィールドワークが、私の遊びだったのですね。

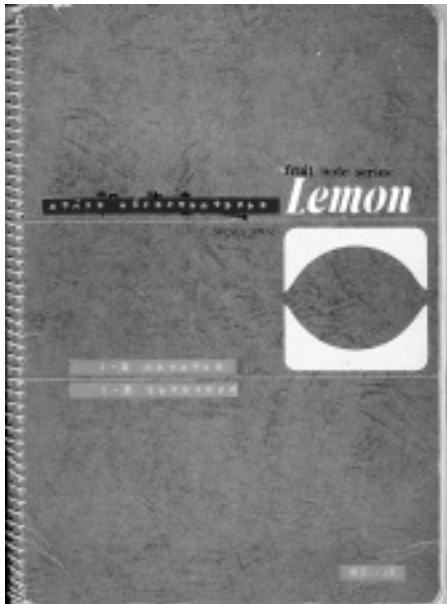
遊び相手がいないという孤独や遊んでくれないという差別に対抗したり寂しさを補償するために、私の場合は「知識」に頼ったのではないかと思えます。職員の子どもであるという自負があったことも確かで、恥ずかしくないように生きたいという気負いも、子供ながらに持っていた気がします。

地域の巡検を重ねると、幌内という場所は北海道にとって近代史がスタートした場所であるとか、炭鉱という巨大なシステムで様々な要素が絡み合いながら石炭が生産されるのだということが、理解できるようになりました。知ることは楽しいと分かってくると、今度は幌内だけではなく、違う所を見てみたいくなります。

中学1年となった1976年春には、同級生の一人を無理矢理誘って、隣の沢の万字地域(閉山直後の栗沢町万字炭鉱・岩見沢市朝日炭鉱)に出かけ、またこれに味をしめて、その年の夏には夕張まで足を伸ばすようになりました。なにせ小学校5年の春休みに、夜行列車と連絡船を乗り継いで、福島県福島市の叔父の家へ一人旅をしたほどですので、万字や夕張に行くなど訳もないことでした。

先ほど回覧した私のノートは、夕張へ行ったときの「調査報告書」です。改めて予定行程表を見ると、「岩見沢で300円のとりめし駅弁を買う」というようなことまで1分単位で

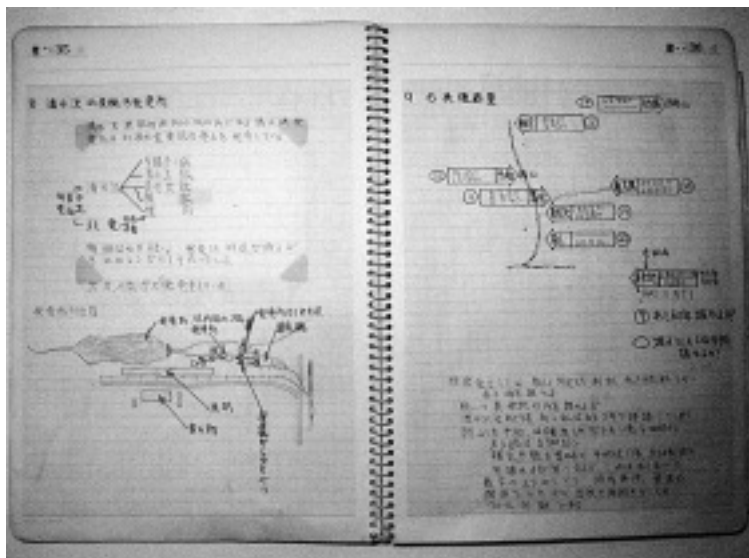
記載されており、私の性格からか綿密なものでした。まだ炭住には電話がない時代ですから、幌内炭山郵便局の電話室から、清水沢炭鉱に異動した父の元同僚とか夕張市役所・夕張鉄道に電話をして、インタビューをお願いします、あらためて依頼状を送ったりしているのですから、今さらながら我ながら驚きです。



夕張巡検ノート（表紙）

仕事の段取りは、労務課にいた父の影響だと思えます。門前小僧が習わぬ経を読むという感じで、誰に教えてもらうことなく知らず知らずに覚えたことでしたが、何せとても耳年増な子どもでしたから。

なぜ夕張だったのかということですが、母の妹夫婦が北炭平和鉱のアパートにおり、何年前に訪ねた時の印象が強かったことが理由の一つです。幌内が一番だと思っていた私にとって、幌内よりも巨大で密集した炭鉱のある空間を目にした時は、ある意味ショックでした。もう一つは、幌内鉱は1975年事故で坑道水封していたため操業できず、多くの鉱員が僚山の夕張新鉱や真谷地鉱へ出向就労していたことが背景にあります。同級生の多くの父親が単身で夕張へ出稼ぎに行っており、その夕張がどのようなまちなのか、みんなに教えてあげたいという動機です。これはちょっと複雑で、単なる親切心ということもありましたが、改めて思い返してみると、労務職員の子供としてできるのは留守宅の民心安定という、大それた考えがあったように思えます。学校に戻って社会科のO先生に夕張巡検の成果をアピールすると、授業中に発表



夕張巡検ノート（本文）

しなさいと案の定トントン話しが進み、50分の授業時間をまるまる使って「吉岡夕張講座」が実現して、小さな労務課員の任務は達成されたのでした。

あともう一つ、私の人生に大きな影響を与えた要素があります。母は1967年に妹を産むのですが、三笠市立病院の産科医の不適切な処置による出産時の大量出血がきっかけで、精神疾患になってしまいました。症状は周期的に躁状態となるもので、頼む必要のない商品が我が家に続々と届けられることが続くと、それが母の入院のサインでした。母は、その後亡くなるまで30年間にわたって、ほぼ半年周期で入退院を繰り返していました。

社宅に住んでいますから、周囲は薄々気が付いていたようで、「お母さんは？」という視線は、子供心にいたたまれないものでした。それを特に実感するのが元旦でした。幌内鉱労務課では上司の社宅を巡って飲み歩く風習があり、朝9時頃からヒラ職員や連絡員たちが数人で飲み始め、主任・係長・課長代理・課長と職階順に人数を増やしながら結集し、夜の10時過ぎに労務部長の役宅でお開きになるまで飲み続けるのです。係長クラスの我が家に来るのは午後12時～2時頃で、通過時間に合わせて酒肴を用意します。我が家では毎年、祖母や父が縁のある秋田の代表料理キリタンボを出すことで好評でした。子供にとってお年玉を貰える絶好のチャンスであり本来は浮き浮きする局面なのですが、母がいない正月は、主客お互いに知ってて知らないフリという微妙な雰囲気があり、子供心に複雑な影を落としました。

父の帰宅は毎日のように午後10時過ぎですから、祖母が母の入院中は私たち兄妹の面倒をみてくれました。私も掃除・洗濯・料理など一通りの家事はこなす能力を身につけて、買い物は好きで良く行きましたが、生協職員や知り合いに「お母さんお元気」と聞かれるのは苦痛でした。

このような、ある意味で屈折した幼少期に、ぐれずに育ったものだと、今さらながら思います。そこで自分を支えていたのは、知識という糧や職員の子どもという誇りというか、そういう見えないものだったのでしょうか。

5. 布施本から逆に触発された研究原点

こういう中で育った私が、大学で布施本に会って、逆の意味で触発され、関心の焦点が絞られたのです。当時、布施本のような労働者層に基軸を置いた研究は、三好宏一先生など結構たくさんの方が取り組んでいましたが、私にはもっと明らかにすべきだと思うことがありました。

一つは、なぜ会社が上手くゆかないのだろうということでした。あれほど繁栄した石炭鉱業が、わずか20年余りで、こんな姿になってしまうのは、何かが間違っていたのだろうと考えました。父が勤める会社が倒産したら我が家の生活はどうなるのだろうと日々実感し、今日の出炭量を心配しながら育った身としては、当然の疑問だと思います。

自分の育った幌内砒を知れば知るほど、すごい価値があることが実感できました。北海道で最初に近代炭鉱が開かれ、日本で三番目に鉄道が敷かれ、最新鋭の立坑があって、日本で一番深い所にある切羽から国内有数の産率で年産150万トンという石炭を出しているのに…どうして炭鉱はうまくいっていないのだろうと。それは、国の政策が悪いとか資本家が隠しているのだとかではなく、単にやり方がまずいのではないかと。現に、常磐炭礦や太平洋炭礦など、それなりにうまくやっているではないか。それだったら、問題は経営だろうということです。経営という視点から炭鉱を見ることは、誰もやっていない分野でした。

二つめは、企業経営が地域に対して、どう影響を与えるのかということでした。私は、

母が毎月札幌の精神病院に通院する時に一緒について行き、炭鉱地帯の子供としては、外界を良く知っている方でした。札幌には動く階段があるんだよとか(笑)、旗の立ったご飯があるんだ…ということを学校で話し、文化の伝道師みたいなものでした。話すネタを探すとという視点で観察してみると、札幌はドンドン成長し新しくなるのに、幌内はドンドン寂れるばかりです。どうしてこういうことになるのだろうか、ずっと思っていました。

地域を巡る癖がついた私は、大学では学部異なる教育学部のサークルの地理学研究会に所属しました。社会学とは違い、空間を通じて人の営みを捉えようという地理学は、まさに私の関心にフィットしたものでした。特に企業経営が空間にダイレクトに現れる指標として、炭鉱住宅に興味を持ちました。地理学研究会では、自分が関心のあるテーマを発表するゼミが学生だけで運営されており、毎年何回かスピーカーとしての順番が回ってきます。通常はレジュメ7~8枚で60分程度の発表なのですが、私は三笠の炭鉱住宅について調べ、20枚を越えるレジュメをガリ版で刷って延々200分も発表しました。これがベースとなって、大学の卒論へ結びついて行きます。

私は、布施本が炭鉱の片方から光をあてたものであれば、もう片方の暗闇になっている部分に光を当てたいと思ったのです。漠然とした興味から入った経営学科、子供のころの延長線上にあった地理学研究会、この二つの分野をクロスオーバーするものが、今から思うと地域のマネジメントと表現されるようなものであった気がしています。

卒論は、北海道の全部の炭鉱を訪れて話を聞き、3ヶ月ほとんど寝ないで3万字を超えるボリュームの『戦後北海道の石炭産業—石炭斜陽化以降の北海道炭礦汽船の経営を事例として—』を仕上げました。卒論に取り組んでいる時に、青木さんと出会いしました。

青木さんに、こういう卒論を書きたいので資料を見せていただけないかと手紙を出したのです。ところが最初は非常に対応が冷たくて(笑)、多分、たいしたことを書かず表面的なことをなぞって帰る学生が多く来ていたのでしょうね。これに懲りていた青木さんには、どうせ吉岡もそのうちの一人であろうと思われた節があります。話をしてみると、青木さんも新幌内砦出身で、私が新幌内にいた時には、青木さんと私の社宅は200メートルくらい離れていないことがわかりました。私と青木さんは12歳違いですが、たまたまあの時代の瞬間に行き合っているということなのです。

石炭博物館の近くにあった、学校を改造した宿泊施設「ファミリースクールふれあい」に泊まって、資料をあたりました。雪が降り続き誰もいない園内には、当時流行していたレベッカの「フレンズ」という悲しい曲がエンドレスで流れていました。博物館の二階の書庫は、まさに宝の山で、こんな中で暮らせたらいいなと思うくらい貴重な資料がたくさんありました。それは、青木さんが博物館に着任してから、一生懸命揃えてくれたものです。この時以来、青木さんと私は、一緒に空知産炭地域のことに取り組んできたのです。

6. 今日に続く活動

このようなお話しをしているちょうど今は、夕張市の財政破綻を契機に閉鎖されてしまった石炭博物館を、市民の手で再開できないかと取り組んでいます。手元に配布した資料(『石炭博物館の再開に向けて—これまでの経緯と運営計画—』)は、1月13日に記者会見で発表したもので、市民団体でやっていきますと決意表明するために、正月休み返上で私が作成したバックデータとなる資料です。指定管理者の応募期限は明日までなので、今朝6時まで申請書類を作っていました。今日は家に帰ったら書類や配布物を40部コ

ピーして、明日は夕張に行って申請書を提出するという状態です。

これは、夕張が全国的な話題になっているから始めたのではなく、私自身が幌内砒の出身で、母は夕張の平和砒出身であるという出自と、ここ10年にわたって空知産炭地域で炭鉱遺産の活用の取り組みを展開してきたことがベースになっています。石炭鉱業は、良いことも悪いことも含めて、北海道の歴史を語る上で欠くことのできないものです。さらに、空知産炭地域は、夕張だけではなく、三笠や赤平などの各都市やそこにあった各炭鉱が一団となって、北海道や日本に影響を与えまた与えられる相互作用を展開してきたのです。過去の経緯—今の問題—地域再生に向けた未来への展望という時系列と、夕張—空知産炭地域—北海道—日本という空間的な広がりを総合して、一つのストーリーとして繋ぐのは、やはり私の任務なのだろうと実感しています。

このような経緯と思いを持ちながら、「炭鉱の記憶推進事業団」という団体を立ち上げ、NPO法人として活動しようと準備しているところです。これは、たまたま夕張の石炭博物館の再開運動がキッカケとはなりましたが、夕張だけの団体ではなくオール空知の体制で進めているところです。私が理事長で、青木さんは副理事長になってもらいました。活動の様子は、ホームページ (<http://www.soratan.com/>) で随時情報をアップしているのでご覧頂き、是非とも入会をお願いします。特に小内先生のような、布施本の奥付に名前が掲載されている方には、その大作をまとめられた最後の一仕事として、年会費10,000円の運営会員として入会して頂きたいと思っています。

夕張の問題は明日の空知産炭地域全体の問題で、空知の問題は明日の北海道の問題です。夕張をはじめとする空知産炭地域は、問題が凝縮された先進地帯だという意識で取り組ん

でいます。反省するべきところは反省して、がんばる部分はそのプロセスをアピールしていく。今まではモノに頼って生きてきたのを、知識など形のないものを力の源泉にしないと地域再生はないでしょう。しかし、人は形のあるものがないと理解したりキッカケをつかむことができないので、すでに地域の存在している炭鉱遺産は、追加投資不要で新たな展開の手かかりになるはずで

これまで、自分史について長々とお話をしてしまいました。最後に、私がこれまで炭鉱で生きてきたプロセスから、何を学びとったのかというお話しをしたいと思います。

一つめは、社会は日々変転し、同じ状態が続くことはあり得ないのだということです。吉岡家の歴史を見てみると、国は滅びる、会社は潰れる、地域は駄目になることを経験しています。樺太がまだ日本領であったならば、今ごろ私は吉岡木材の専務取締役だったかもしれませぬ。それが環境変化によって叶わなくなりました。炭鉱もしかりです。そのため、当初考えていたプランAが駄目な場合をあらかじめ想定して、プランBを考えておくとか、出来るだけ自分の可能性や選択肢を増やしておきたい。それが、今日的なキーワードとなっているサスティナブルな（持続可能な）発想に繋がっていくのだらうと、最近になって改めて思っているところです。

二つめは、立場が異なると様々な正解があり得るのだということです。自然科学では、水を分解すると、誰がやっても必ず酸素と水素になり正解は一つです。しかし実際の社会では、絶対的に正しいということはなく、すべては様々な関係性の中で規定され、それは日々変転するものなのだということです。

このような視点から、今の夕張の問題を考えてみたりしています。かつての夕張は、構造化された強固な社会があったように見えますが、布施本の調査を行っていた短い期間の中でも日々変化していたはずで

いスパンで積み重なると、大きな変化となって現れてきます。

当時の炭鉱社会では、確かに一見すると虐げられたり抑圧されたりするという現象が見られたかもしれませんが、内部にいる私から見ると、実は逆に頼っていったり、お互いに持ちつ持たれつであったりというダイナミックな関係があって、それを管理ととるかマネジメントととるかは立場によって違うのですが、ある種の秩序というか規制というものが働いていたような感じを持っています。確かに経営側に問題は多かったけれど、私から見ると労働者側も格好の良いことを言っているが、その実態は何だったのだろうと思うことも多くありました。たまに会社が強すぎて保安軽視に走ったり、逆に組合が強すぎて過度な要求に繋がったりという蛇行状態ですが、概ねトータルで見ると、極度に突出していない、ある一定の秩序のようなものの中で団子状態になって進んでいたように思えます。大きなところで経済的な規律と強制がブレーカーのように働き、実際には労務という専門的に調整機能を果たす職能を抱えていました。

炭鉱がなくなると、その役割を市役所に求めました。しかし、個々人が同等の立場と権利を主張し、「あなたがしなさい」という規律や強制力がない社会では、自分や互いに律する自治の力が必要となるのですが、それは全く訓練されてきませんでした。結局は野に解き放されて「たが」が外れたのだということが、今の夕張の問題を見て感じているところです。炭鉱では、大きく脱線しないように、神の見えざる手という訳ではないのですが、

何かの大きな力で結果的にバランスがとれていた。それが一挙に崩れてバンドラの箱のようになってしまったというのが、現在の夕張を見ての私の感想です。

今後、どう地域を再生し、そのためにどのような具体的な取り組みを展開すれば良いのか。大まかな方向性を決めてキチンと示すことは必須ですが、そのプロセスは一つではないはずですし、最初から最後まで見えているものではありません。限られた状況の中でも、方向性に向かって進むためにベストな選択肢を選び、そして何よりも新しい現実を起こすことで新たな可能性が生まれ、それまで想定できなかった新たなステージや選択肢が見えてくるのです。これはよく考えてみると、当然そこは人が担っていくのですが、どうやってその方向へ向けようとか、どうやって色々な障害を乗り越えて進もうとか、そういう流れを作ることが大切です。決して命令だけでできるものではなく、提案したり、雰囲気を作ったり、時には宥めたり脅したりすることが必要な局面もあるかもしれません。

結局のところ、このような働きかけは、父が炭鉱の労務でやっていたことなのだなと思っています。たまたま父は、炭鉱の石炭生産のために、このような職能を果たしてきました。私は、社会や地域の将来のために市民が自ら活動するという立場での実践ですから、父とは対象も目的も違います。しかし、その職能は、結局は父と同じ労務＝マネジメントなのだと思いながら、炭鉱というフィールドを共通項にして、親子二代にわたって同じことをやっていると感じています。